絵　図　榊原時代城下絵図

本城下絵図は、享保年間に榊原時代の城下絵図を模写したものです。この榊原氏（寛文七年（1667）から宝永元年（1704））の時代、15 万石の城下町として、江戸時代を通じて最大規模となります。

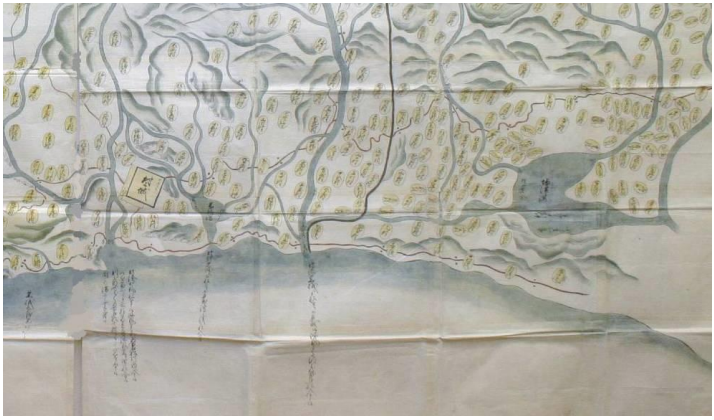
人口も武家地には、100 石以上の家臣が 380 余人、足軽・中間含め 1705 人。町人地には、男女合せて 8596 人。合計約 10300 人（元禄 16 年）が住んでいたといいます。

この時代の村上城下の様子を伝えるものとして本館にとって貴重な城下絵図のひとつです。

国絵図　榊原時代御領内絵図

本御領内絵図は当時のものというより、後に模写されたものと思われますが、榊原氏 15 万石の領内（南は寺泊から北は羽越国境まで）が描かれています。一枚が縦約 188 ㎝～227 ㎝、横幅 136 ㎝後、四枚組ですので、広げると幅が 540 ㎝強という大きなものです。

この絵図をもとに、奥の細道で芭蕉が庄内から越後へ入った当時の道筋を連想できます。また、紫雲寺には干拓前の「塩津潟」が描かれており、当時の越後の様子を知ることができます。



※画像は全体の一部です。

城絵図　越後国村上城絵図

享保五年（1720）に間部氏に替って内藤氏が村上藩主として移封してきます。この城下絵図が描かれたのは享保七年（1722）ですので、内藤氏が入封して間もない時期といえます。

城下絵図というと、城郭と武家地と町人地や寺社などが描かれ、中には家臣の居住地まで記載したものもあります。これらの絵図と比べ本絵図は、城郭（特に臥牛山上）の石垣の高さや長さなどが詳しく記載された石垣の実測図的なものであったと思われます。

国絵図　越後国全図

本国絵図は文政元年（1818）に描かれたもので、1 枚が縦 220 ㎝、横幅 131 ㎝、5 枚組で、広げて並べると 650 ㎝余の大きなものです。

内藤氏時代の越後国の様子がわかるもので、この時代になると、榊原氏時代にあった塩津潟は干拓され新田となっていることがわかります。また両者の絵図の比較から、街道や道路などが前時代よりも整備されてきたこともわかります。また、絵図全体からは、測量技術の進歩もあり地図としての正確さも増してきています。

※画像は全体の一部です。

国絵図　越後国絵図

本絵図は、凹凸がありますが、縦 103 ㎝、横 210 ㎝に細かく描かれたものです。

絵図には文政元年(1818)の越後国全図には描かれていない、現在の新潟市内野の新川が「堀切」として描かれています。村上藩と長岡藩の共同で行われた、鎧潟・田潟・大潟の悪水（水害の要因となる河川や湖沼の水）を内野村金蔵坂を掘割って日本海に吐き出すという治水事業が完成するのが文政十年（1827）ですので、その後に本絵図が描かれたものと思われます。

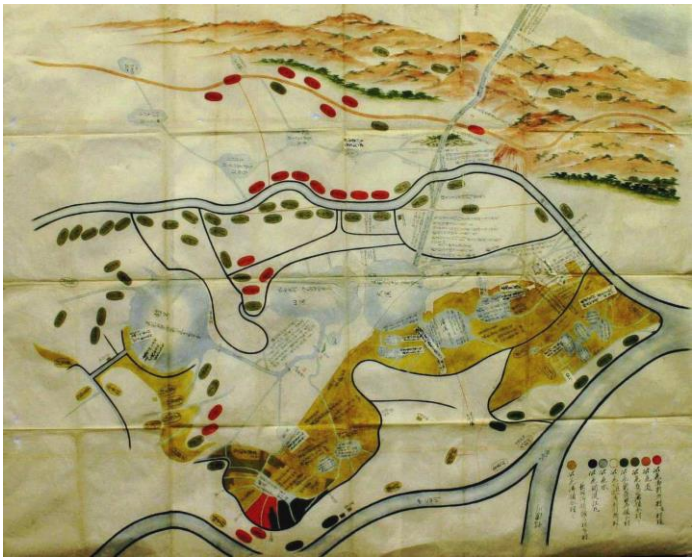
※画像は全体の一部です。

領分絵図　内藤氏時代御領分絵図

江戸時代、この鎧潟、田潟、大潟（通称三潟）一帯には数多くの潟や沼、窪地があり、豪雨ともなれば一面泥の海と化しました。この打開策として、直接、悪水を日本海に注がせるという土木工事が計画されました。

これらの工事に要した費用は六万両を超え、長岡藩六割、村上藩四割と定められましたが、村上藩はその大部分を藩が賄いました。

本絵図は、その土木工事を担当した村上藩士の家に伝えられていたものです。



城絵図　幕末城下絵図

本絵図は、寛政年間（1789～1800）に測量した城下絵図に改訂を加えたもので、家臣の住居位置などは明治元年ころのものです。

測量精度が高く、多少の調整が必要ですが、ほぼ現在の地図に合致し、当時の堀敷や屋敷割などを現在の地図に落とすことができます。

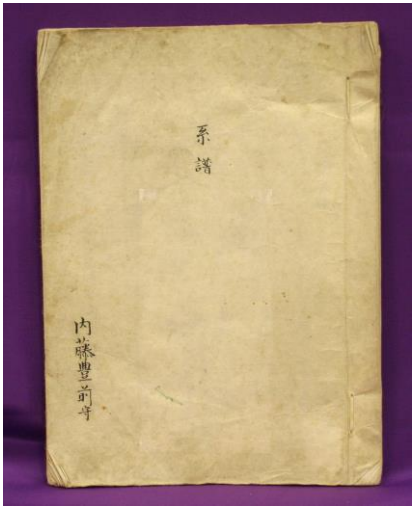
また、おしゃぎり会館に先祖のルーツ調べに訪れる方が、その居住地を探すときなどにも活用するなど、利用価値の高い城下絵図として、本館でも複製を作成して頒布しています。

文書資料　内藤家系図

表書には「系譜　内藤豊前守」とあり、裏書には「寛政十一年巳未年十二月　内藤豊前守」とあります。初代信成（のぶなり）から九代信凭（のぶより）までの内藤家の系図で、官位、官職名、生年、母、妻女、子、没年等が記されています。

初代藩祖信成の項には、弘治三年松平元信(徳川家康)に初めて拝謁して、家康より元信の一字を賜り「三左衛門信成」と号したとあります。

また、年月不詳としながら(家康より)御頬当を拝領したとあります。

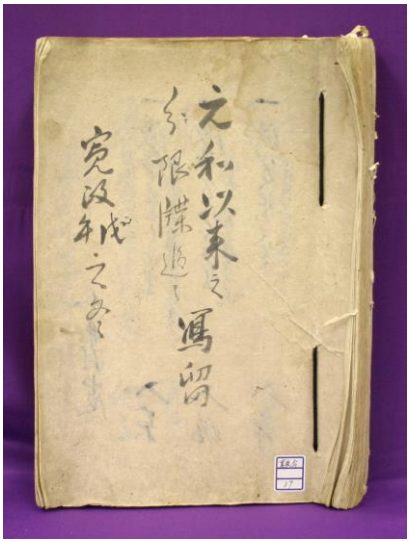


文書資料　内藤家分限帳

分限帳（ぶんげちょう）とは家臣の名簿であり、家臣の家格や禄高を記したので、家臣団や藩政の構成などを知ることができます。

また、各地から村上へ、内藤藩士であった先祖のルーツ探しに来られる方が近年増えていますが、こうした対応にも大事な資料といえます。

この内藤家分限帳には、二代藩主信正（のぶまさ）が伏見城代のときの分限帳、三代信照（のぶてる）が奥州(現福島県)棚倉藩主のときの分限帳、十代信敦（のぶあつ）のときの天明七年越後村上分限帳他が綴じられています。



文書資料　磐船活版史記

村上内藤藩の事績として、「磐船活版史記（いわふねかっぱんしき）」の印刷刊行があります。

天明七年（1785）に藩主内藤信敦（のぶあつ）に召抱えられ、藩校克従館の教授となった儒学者服部七左衛門元寛（もとひろ）は、藩士に史記を講義するにあたり、木製活字を制作し、約 2 年間の歳月をかけて印刷したものです。その後、各藩も相続いて活版史記が刊行しますが、村上藩が全国に先駆したのです。

現在は、本館所蔵のほか、宮内庁書陵部と、京都大学に蔵されているのみと聞いています。